マスター to アーティスト

【第6回】
＜たった一人のオーケストラ＞

鷹野雅史 音楽学部 准教授

1961年　神奈川県生まれ
1981年　尚美高等音楽学院（現 東京ミュージック&アート尚美）卒業
1980年代～　ヤマハ本社専属エレクトーンデモンストレーター、プロ活動を開始
1987、88年　ヤマハコミュニケーションセンター（NEW YORK）勤務。在米、NYに訪れる多くの世界の一流ミュージッシャンと交流を持つ

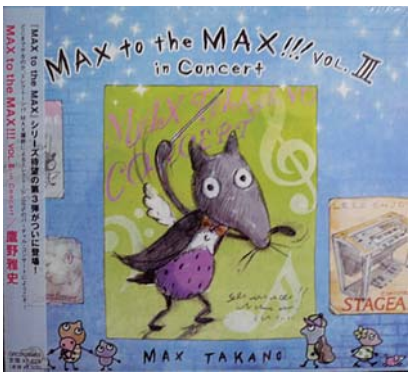
MAX TAKANO名義で、英国で4枚のアルバムをリリース。国内では2005年に『MAX to the MAX!』、2006年に『MAX to the MAX!! VOL.II More ORCHESTRA to go!!』。そして、2008年12月『MAX to the MAX!!! VOL.Ⅲ in Concert』をリリース。

「楽器から音が出て、聴く人の耳に入ったときに『絵』が浮かんで欲しいと思うんですね、例えば…」話もそこそこに、研究室の一角にあるエレクトーンにおもむろに腰掛ける。電源を入れ、いくつかのスイッチを手際よく操作しながら、「例えば、オーケストラの絵を描きたいと思うと、こんなことから始まるんです…」　鍵盤に指を置くとオーボエの音色。「A」の音が響くと、ストリングス、管楽器、打楽器が加わっていく。オーケストラのチューニングの風景だ。一瞬にしてホールの情景が浮かんでくる。コンサートが始まる前の期待感、あのワクワクするような感覚に、我知らず心が踊ってしまう。そして、「カッ、カッ、カッ」とタクトを叩く音が加わり、チューニングは終わる。これには思わず笑いがこみ上げる。エレクトーンという楽器が持つ能力は、どうやら音楽を奏でるものだけではないらしいということが理解できる。そして、その演者にも、いわゆる演奏家というだけではない何か別の資質が必要なことに気付かされる。ピアノの奏者は技術や表現力を追求するが、エレクトーンではもっと別の素養が必要という。しかし、紛れもなく音楽家としての素養。

エレクトーンという楽器は、ヤマハ株式会社が保有する登録商標で、いわゆる電子オルガンである。鍵盤を用いる楽器の代表といえばピアノだが、用いられる技術はピアノとは全く異なる。また、鍵盤を用いた電子楽器にはシンセサイザーがあるが、エレクトーンは、自由に音を創造することのできるシンセサイザーとも、似て非なる楽器である。演奏の技術をひたすら磨くのがピアノ、どこまでも音を創造して作り上げいくことができるのがシンセサイザー。エレクトーンの立ち位置は微妙で、演奏技術を研鑽するという点ではピアノ、音楽の可能性を広げるという点ではシンセサイザーに、その地位を譲ることは否めない。

エレクトーンにできることは何か？

最大限エレクトーンの持ち味を発揮できることはどんなことか？　そんな問いの答えを求めて、自分にできること、面白いと感じることにすべてを注いできた。



最近リリースされた３枚目のアルバム
『MAX to the MAX!!! VOL. Ⅲ in Concert』

MAX TAKANO
Concert Schedule 2009

3月 20日… スタイリッシュコンサート
　　～藤枝市民会館
21日… ジョイントコンサート
　　～大東私立総合文化センター
4月 26日… メモリアルコンサート～アクトシティ浜松
5月 10日… コンサート～千葉県民会館
6月 28日… Live at MIKI～三木楽器心斎橋店
7月 20日… コンサート～結城市民文化センター

このほかに、１月に地元の小学校で
子どものための演奏会を行った。

幅広いレパートリーとエンターテイメント溢れるワンマンオーケストラのコンサートは、どんな人をも魅了する。世界31カ国を歴訪、海外にも多くのファンを持つ。

音楽をこよなく愛する教育者である父の許で、音楽家になるように育てられた。胎教にヴィヴァルディ、生まれてからも常に周辺には音楽が絶えることなく流れるような環境だった。そのかいあってか、物心の付く頃には絶対音感を身に付けていたという。喜んだ父親はすぐさまピアノを買い与え、音楽にいくらでも触れられるように近くのレコードショップにツケが利くように頼み込んでくれた。恵まれた環境の中、好きなだけ音楽に没頭することができた。楽器の練習もそうだが、それ以上に聴くことを楽しんだ。クラシックに始まり、ジャズ、ビートルズ…、当時リリースされるレコードを片っ端から聴いていったという。体の隅々まで、音楽に浸りきった日々…。

そんな経験が、エレクトーンと出会ったとき、一挙に開花したのだろう。ピアノでもなく、シンセでもない。エレクトーンに必要な演奏性と発想。体に入っている音楽が、エレクトーンを通して様々な世界を見せてくれる。２段のマニュアル（手）鍵盤と足で弾くペダル鍵盤。それぞれに異なる音色を割り当て、あるときはフルオーケストラ、またあるときはジャズ・コンボ、はたまた雅楽隊…、とまさに変幻自在、当意即妙に変化する。そして、そのどれもが音楽だけで鮮やかな情景を描き出す。観客は手品でも見るように、エレクトーンの音の世界に引き込まれ、描き出される情景に心を遊ばせるだけ。目くるめく“TAKANO WORLD”に酔いしれるばかりとなる。

取材する中でも、次々と音楽が奏でられる。ジャンルを超え、年代を超え、古今東西のあらゆる音楽が縦横無尽に現れる。そして、それらは楽譜もなく、構えることなく、体中から溢れ出てくることに驚く。ジャンルや楽器にとらわれない、もっと包括的な「音楽」というものを知っていなければ、できないことだろう。

「似顔絵を描いて行くことに近いかもしれません。テクノロジーに人間のフィルターを通して、どうデフォルメして見せるか。技術よりも、演者の中身や音楽が問われるものなんですよ」

ピアノのようなストイシズムとはまた違った、それでも紛うことなき芸術の世界が垣間見られた。